



命 > 医師TOP > 谷口恭の「梅田のGPがどうしても伝えたいこと」
> 大勢の覚醒剤使用者をみてきて考えること

谷口恭の「梅田のGPがどうしても伝えたいこと」

🔔 連載をフォロー

大勢の覚醒剤使用者をみてきて考えること

2021/04/15

谷口 恭 (太融寺町谷口医院)

🏠 プライマリケア

🔍 違法薬物 覚醒剤

🖨 印刷

🔗 シェア 0

0

医学部に入学してから現在に至るまで四半世紀がたつ。その間、報道されるたびに、最初は驚き、戸惑い、怒りが生じ、そして今では別の感情を抱くようになったのが医師の違法薬物摂取だ。

他の職種なら恐らく報道されないような医師の違法薬物事件は少なくない。社会的責任が重い医師だからこそ報道の価値があるのだろう。最近では、2021年2月にマスコミ出演で有名な東京の医師が覚せい剤取締法違反で逮捕された事件が派手に報道されていた。

昨年(2020年)で言えば、大阪府枚方市の医療機関勤務の20歳代女性医師がコカインと大麻キッド保持で逮捕された。その半年ほど前には大阪府高槻市の30歳代男性医師がコカイン所有で逮捕された。報道によればこの医師は10年前から違法薬物を使用していたそうだ。

医道審議会医道分科会の答申を受けて年に一度発表される医師の行政処分でもほぼ毎年違法薬物で医師が処分を受けている。これだけ頻繁に報道されると、最近では「またか……」と感じ、そのうちに記憶が薄れていくことが増えてきたが、今も強烈に印象に残っている事件もある。その中から2つの事件を振り返っておきたい。

1つは1998年4月に起こった兵庫医大の医師4名が覚せい剤取締法で逮捕された事件だ。これはそれまでの僕が抱いていた医師に対する「像」が崩れ去った出来事で、この報道を知ったときの衝撃は今も忘れられない。

当時の僕は29歳、医学部の3回生。秀才ばかりの同級生たちとは異なり、凡人の僕はとにかく勉強量では負けてはいけなくて必死だった。ほとんどの学生が有名進学高校出身者なのに対し、僕の高校は医学部入学など数年に1人いるかないかといった田舎の公立高校。しかも僕はその高校でも成績は下の方だったのだ。頭の良さでかなうはずがないのは当然として、医学部の若い同級生たちはきっと優れた人格を持ち合わせているに違いないと思っていた。

入学して3カ月が過ぎ夏休みに入る頃には、そんな秀才たちも実は普通の若者で、恋愛や将来の進路に悩むんだと、その意外性に驚いたこともあったのだが、それでも僕の医師に対する「像」は崩れていなかった。高い道徳観を持ち、誰からも尊敬されるような人物、それが当時の僕の医師に対するイメージだったのだ。

そのイメージを一気に崩壊させたこの事件を当時の報道から簡単に振り返っておこう。

「医師がシャブをキメて診療」にショック

1998年4月、兵庫医大の医師4名が覚せい剤取締法で逮捕された。報道によると、逮捕された主犯格の救急医は「10年前に米国に旅行した際に大麻を吸入したことがきっかけで覚醒剤にまで手を出した」「勤務中の休憩時間にも覚醒剤をうっていた」などと供述。入手先は大阪市西成区や中央区のアメリカ村の密売人に加え、この救急医が兵庫医大とは別の勤務先の病院で知り合った患者から大量に購入していたことが分かった。

を想像いただけるだろうか。大学病院の医師が自分の患者から仕入れたシャブを勤務中にキメていたというのだ。人を職業で判断してはいけないことくらい医学部入学前の社会人の経験から理解しているつもりだったし、覚醒剤を「スピード」や「エス」などと呼び、ダイエットや一夜漬けの勉強などの目的で気軽に摂取していた知り合いも過去にはいたが、さすがに、医師がシャブをキメて診療、などとは想像だにすることがなかった。



覚醒剤はそのうちに耐性が生じ、使用量が増えていく。この事件の数年後の研修医時代、錯乱して高所から飛び降りた40歳代男性の覚醒剤中毒患者を担当したことがあった。かつては一部上場の大企業で勤務していたというその男性から「使用量が増え、ついには昼休みに職場のトイレでうつつようになった」という話を聞かされたときも特に驚かなかった。大学病院の医師もしていたことなのだから。

もう一つ、医師の覚醒剤使用で忘れられない事件を紹介したい。

2005年2月、兵庫県尼崎市内の医院の副院長を務めていた当時40歳の女性医師が覚せい剤取締法違反と麻薬及び向精神薬取締法違反で逮捕された。女性医師は卸業者から購入した向精神薬約2400錠を密売業者に転売していた。「覚醒剤を買いたかったが費用がかさみ、薬を横流しした」と供述。覚醒剤以外にも大阪市の自宅 MDMA も所持、さらにペランダで大麻草を栽培していた。女性は逮捕の2年前から交際する男性と一緒に暮らし「一緒に使っていた」。同年7月、大阪地裁裁判官は「薬物を適正に扱うことが求められる医師が、交際していた男性との関係を保つために違法薬物におぼれた」として懲役2年の実刑判決を言い渡した。

この事件が当時さまざまな大衆紙で取り上げられたのは「女医が裏社会の男性と同棲、覚醒剤を用いたセックスに溺れ、覚醒剤購入のために向精神薬の横流しにまで手を染めた」というそのスキャンダル性にある。離婚歴があることやツーショットダイヤルで知り合ったというその男性と覚醒剤を用いたセックスのとりこになっていたこと、逮捕されてからも「あの人とつながっていたかった」と繰り返し訴えていたことなどが書かれていたと記憶している。

兵庫医大の事件では主犯の救急医が「自分の力では薬物を断ち切ることができなくなってしまった。逮捕されてホッとした」とコメントしている（1998年4月21日毎日新聞）。女性医師の事件では、上述のように裁判官が「交際していた男性との関係を保つために違法薬物におぼれた」という表現を使っている（2005年7月8日産経新聞）。これらが物語っているのは、もはや理性の力では断ち切ることができない覚醒剤の恐ろしさだ。偏差値が高く社会的に尊敬される職業とみられている医師の理性をもってしても覚醒剤の前にはひれ伏すしかないのだ。

もしも、「自分だけは絶対にそんなものに溺れるはずがない」と考えている医師がいたとすれば考えを改めた方がいいかもしれない。どれだけ立派な医師であろうとも、だ。2014年に覚醒剤使用で週刊文春にスクープされた医師は当時医学部の教授だった。外国人の愛人との性行為に及ぶ際に使っていたらしい。なお、兵庫医大の救急医も、セックスに溺れた女性医師も患者からの評判はすこぶる良好だったと報道されていた。

患者から「薬物をやめられない」という相談を受けたときは全力で支援することを伝えるべきだし、「覚醒剤を断ち切ることができました」という患者と接するときは、「その状態を維持するのはときに簡単でないこと」を患者と共に認識する必要がある。確かに、薬物に手を出したきっかけは「感心できないこと」が多いのは事実だが、そこを責めてはいけない。責めても解決することは何もない。だから「薬物＝反社会」と考えてはいけない。「ダメ、ゼツタイ」を強調し過ぎれば依存症患者を余計に苦しめることになるのだ。

だが一方で、薬物の危険性をしっかりと伝えることも重要だ。前述の考えに相反するようだが、僕自身は生涯にわたり覚醒剤に手を出すことはないと思っている。その最大の理由は、子どもの頃に繰り返し見ていたテレビCM「覚醒剤やめますか。それとも人間やめますか」が脳裏に焼き付いているからだ。

「ママー、ママー」と泣き叫ぶ子どもには目もくれず、若い母親が自身の左腕に覚醒剤を注射。母親の無機質な顔面は「廃人」以外に言葉が見つからない。無音のシーンがしばらく続いた最後に「覚醒剤やめますか、それとも人間やめますか……」という抑揚のない

のCMはだいたいこんな感じだった。これをまだ物心がつかないくらいの年齢時に繰り返し見せられた僕にとって覚醒剤は今も恐怖でしかないのだ。

恐らく、現在の倫理規定ではこのCMは放送できないだろう。恐怖を与えすぎると同時に、依存症の患者に罪悪感を背負わせることになりかねないからだ。依存症患者への差別という声が上がるともかもしれない。だが、僕自身はこのCMのおかげで現在も覚醒剤とは無縁の生活を送れているのは事実だ。

患者のみならずプライベートも含めて、これまで大勢の（元）覚醒剤使用者をみてきた。精神科受診や自助グループ参加を勧めてもうまくいかないケースが多かった。過去のコラム「[BZは〇〇につながる地獄の門を開く](#)」で紹介した、タイに沈没したジャンキーたちとは結局全員と連絡がつかなくなった。過去に依存症だったという患者、逮捕歴もあるという患者は当院でも診ているが、残念ながら最近顔を見ていない……。薬物の中でもとりわけ覚醒剤は難しい。覚醒剤に手を染めた医師たちをくばうつもりはないが、そんな彼（女）らから学ぶことがあるはずだ、と今は考えている。

1

シェア 0

0

著者プロフィール

たにぐち やすし氏 ●1991年関西学院大学社会学部卒。商社勤務を経て、2002年大阪市立大学医学部卒。研修医終了後、タイのエイズ施設でのボランティアを経て大阪市立大学医学部総合診療センター所属となり、現在も同大非常勤講師。2007年に大阪・梅田に開業。日本プライマリ・ケア連合学会指導医。労働衛生コンサルタント。



連載の紹介

谷口恭の「梅田のGPがどうしても伝えたいこと」

患者さんに最も近い立場で医療を行いたい……。それを実現するため医師6年目に資金300万円を開業した谷口氏。「どのような人でも、どのような症状でも受け入れる」をポリシーに過去11年で3万人以上の初診患者を診察した経験を基に、開業医のやりがいや苦勞、開業医に求められるミッションを若手医師向けに語ります。

[⊕ 連載をフォロー](#)

この連載のバックナンバー

大勢の覚醒剤使用者をみてきて考えること

2021/04/15

春の恒例、主訴「診断書をお願いします」に思うこと

2021/04/08

BZは〇〇につながる地獄の門を開く

2021/03/31

医療者が知らねばならないセクシャルマイノリティーの権利

2021/03/24

ヒルドイドをめぐる無用なストレスに思うこと

2021/03/17